

授業科目名	民俗芸能論	担当教員	大澤 寅雄
必修の区分	選択		
単位数	1 単位		
授業の方法	講義		
開講年次	3 年 第 2 クォーター		
講義内容	<p>日本の各地で、祭りや年中行事に伴って、あるいは様々な祈願や感謝を込めて演じ、親しまれてきた芸能を「民俗芸能」という。かつての民俗芸能は、日常生活の安穏や五穀の豊穡を祈り、また死者や精霊を供養するといった信仰が基層にあると考えられてきた。そして私たちの生活様式が大きく変わった現代においても、民俗芸能は、貴重な文化財・文化遺産として、観光や地域振興の資源として、あるいは新たな社会関係を築く紐帯として等々、多様な価値を見出されて伝えられている。その一方で、過疎・高齢化や、地域社会における互助共同の意識の低下などを理由に、継承の危機に直面している民俗芸能の例も少なくない。この授業では、民俗芸能に関する基礎的な知識を獲得すると同時に、そうした現代の民俗芸能を取り巻く様々な問題を理解し、地域の人びととともに問題に対処するための関わり方や実践的な支援の方法について考えてみたい。</p>		
到達目標	<p>現代において一般的な人びとが芸能を演じ伝えることの特質や、社会的な意味や価値などを理解し、同時にそれが直面している課題や困難などの諸問題について、様々な観点から検討し考察できるようになること。</p>		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 ガイダンス：芸能を〈民俗学・社会的〉に考える 2 「民俗芸能」という概念：定義と範囲 3 「民俗」と「芸能」 4 民俗芸能の分類と実例：神楽、田楽、風流、屋台行事 5 民俗芸能の分類と実例：来訪神、獅子舞、盆踊り、その他 6 芸能の伝播と定着 7 芸能伝承を支える社会関係 8 現代における民俗芸能の実践の意義 9 身体技法としての民俗芸能の実践 (1) 10 身体技法としての民俗芸能の実践 (2) 11 民俗芸能と同時代の表現との接続 12 まとめ 		
事前・事後学習	各回の授業の内容に関する論文等を紹介するので、読んでおくこと。		
テキスト	なし		
参考文献	『現代文化論 -- 新しい人文知とは何か』 吉見俊哉 有斐閣 2018 年 『忘れられた日本人』 宮本常一 岩波文庫 1984 年		
成績評価の基準	授業中の受講態度をもとにした平常点を 50%、提出してもらう課題（コメントやレポート）の内容を 50%とし、総合的に評価する。		
履修上の注意 履修要件			
実践的教育	該当しない。		
備考欄	履修者が定員を超過した場合、抽選を行う。		